

閉塞感と不透明感の打開へ

中村 智彦

(財)国際観光開発研究センター客員研究員

2001年には宇宙の旅が実現し、2003年には鉄腕アトムの家族が隣に引っ越してくる。そんな夢は実現しそうにない。ただ、SF小説の中に描かれ出されたいくかの技術は身近に感じている。しかし、21世紀を生き始めた私たちが感じている閉塞感と不透明感、かつての未来図にはなかったものだ。

21世紀が始まった今、多くの若い世代が感じている閉塞感と不透明感、それぞれに関連し合う大きな三つ原因に引き起こされている。第1に日本において戦後50年間続いてきた様々な制度、構造が経年疲労を起こし限界に達している点。第2にはこうした限界が来ているにも関わらず、高齢社会の中でスムーズな世代交代が行われないことによる弊害。第3には、これら複合した原因が引き起こしているIT革新への乗り遅れである。

経年疲労の根元

「景気はいつ良くなるのか」という他愛もない話題が、しばしば真剣に議論される。日本の経済構造、政治や地域経済体制が機能しなくなっているのは、この「いつかは景気が上昇する」という考えが根底にあるからだろう。経済的に発展途上にあつた段階では、多少の上下動はするものの全体としては、右肩上がりでも上昇するのが景気である。しかし、20世紀の終わりに日本

経済は成熟し、先進国国家の仲間入りをしたのである。友人で知日家のフランス人は、「年がら年中、そのうち景気が上昇するとエコノミストや大学教授や政治家が言っている。先進国は、景気をいかに現状維持させるかが最大の課題だ」と言って笑う。しかし、それは冗談では済まず、日本では国家の政策から地方自治体の施策、さらには民間企業の経営方針も、実は「いつかは景気が上昇する」という前提で立てられている。プロジェクト型開発に固執する行政職員も、短期的な不況を乗り切るための公的支援を要求する経済団体も、さらには「来年には」と望みを託すだけの経営者も根底は同じである。

こうした旧来の感覚から脱却しないかぎり、我々は経年疲労した制度から逃れることはできないだろう。21世紀は、従来のような経済成長は今後あり得ないという前提に立ち、先進国型経済の下で、いかなる経済政策を講じて行くべきであるのか、また、地域社会の戦略を立案するのかという議論が不可欠である。そのためには、既存体制の大幅な見直しを避けて通れないことも自覚するべきである。

世代交代の遅れが問題を生じさせる

高齢社会の到来の中で、高齢者の活躍が期待されていることは十分に承知しているし、不可欠であることにも同意する。しかし、世代交代の

遅れが、様々な問題を生じさせていることを取
えて指摘しておきたい。

1999年、大阪府泉大津市や静岡県福田町の
繊維産業に関する調査に関係した。斜陽を続け
る繊維産業であるが、その中にも将来に明るい
展望を回答する企業が少数であるが存在した。
こうした「成長企業」の特徴をアンケート結果や
ヒアリングなどで整理すると、自社の独自技術
やデザイン、アイデアなどを保持していること、
後継者がいること、ITに取り組んでいることが
上げられる。全体としては少数であるが、これら
企業の経営者は、「産地や業界としては衰退す
る」と考えている一方で、「自社の規模は現状維
持もしくは拡大する」と回答しているのである。

「後継者もない。自分の代で廃業だと公言
してはばからない人たちが、組合や地域社会の
中で依然として第一線で活躍する。その結果、
新しい取り組みには非常に消極的になっている
」と静岡県のある繊維業関係者は指摘する。
「10年経てば、経営者たちが変わる。そうすれ
ば、意識改革も一気に進むだろう。しかし、問題
はそれまでこの産業が残っているかだ」と自嘲
気味に話すのは、泉大津市の毛布製造業者であ
る。経営者たちの高齢化、保守化が、やる気ある
次世代経営者の活躍を阻害しているという問題
は、なにもこの2地域に限ったことではない。高
齢な経営者でも積極的な経営を展開している
ケースも少なくない。しかし、次世代へのスム
ーズな経営の移管が行われなければ、日本の経
済競争力は大きく削がれていくだろう。

引き起こされたIT革新の遅れ

日本のIT活用が、遅れている理由は、すでに
挙げた2つの理由が大きく影響している。「今
のところ、みなさん、無ければいけない、何とか

やっているわけでしょう。自分も使わないし、本
当にそんな必要なのかどうか、どうも判らない
ですよ。」こう言ったのは、ある政令指定都市
の幹部職員である。SOHOやソフトウェア、映
像などの新産業育成を謳う計画を立てているこ
の市は、労働組合の反対によって、コンピュータ
の本格導入が見合わされている。インターネット
も全くと言って良いほど使用されていない。こ
のように各自治体でのIT活用の進捗状況は非常
に遅い。その結果、仕事にも使用せず、必要性も
感じない行政職員が、IT化の施策や計画を立案
する状況を創り出している。

一方、行政側にはIT化に警戒感を持つ別の
理由がある。東京都町田市では、玉川学園駅前
の道路拡張工事を実施し、駅前の櫨の大木を伐
採する必要が出てきた。1999年、市民グル
ープが反対に乗り出し、市との交渉の過程を全て
ホームページで公開した。このように交渉の過
程を、広く全国に公開することが市民側に可能
になったのである。また、インターネットを活用
した選挙活動などでも、長野県知事選で大きな
影響力が証明された。東京都墨田区でIT利用
を促進しようという活動をする30歳代の会社員
は、次のようにも指摘する。「公務員の特に50
歳代以上の人は、ITを活用した様々な活動を、
自分たちがかつて行ってきた学園紛争とイメ
ジ的に結びつけている。その上、実際に自分た
ちは利用していないために、得体の知れないグ
ループが次々活動を始めているという警戒感と
恐怖感を持っているのだろう。」

一方、中小企業の若手後継者と懇談すると、IT
導入を巡っての問題が指摘される。30歳代半
ばで後継者として決定されているというものの、
父である経営者は50歳代から60歳代で健在で
ある。最終的な決定権は手放していない場合が
多い。こうした実質的に経営権を握っている世
代は、新聞や雑誌、講演会などを通して、ITの
重要性は認識しているものの、依然としてコン

ピユータは、一部のマニアのおもちゃという考えから逃れかねている。パソコンを導入し、それを使用する後継者や従業員を見ると、業務時間中に遊んでいるとしか思えないのである。静岡県のある商工会の研究会では、「必要なもの判るが、もうこの歳だし、キーボードなどは見るだけで気分が悪い」という意見が出た。大阪で中小企業ながらIT導入を積極的に進めてきた経営者は、「ファックスが導入された時、同じようなことを言って、最後まで使わなかった同業者がいた。今、それらの企業は残っていない」と笑う。一方、東京のある大手メーカーの協力企業の後継者は、「そうして反発する反面、導入することを認めた途端、なんでもかんでもパソコンで出来ると言い張って、高額なものを購入しようとする」と苦笑する。

世代間のITに関する関心は明らかに異なる。通信白書の資料を見ても、インターネットの利用率は35歳辺りを境目に大きな相違を見せる。10歳代後半から20歳代半ばまで大半が利用しているのに対して、40歳代以上になると利用者は少数に転落してしまっている。つまり、ITの進展を声高に議論し、決定権を持つ行政や企業の管理職、経営陣の大半がITを利用したことのない年齢層に属しているのだ。

● 21世紀に

21世紀に一步踏みだし、30歳代は苦悩している。「80年代に仕事をしたかったな。白い上に絵を描けるのなら、さぞかし楽しいだろう」と自嘲的に笑って、将来に頭を悩ませている。その一方で、失策を行い、次代への負債を残した前世代は、依然として責任を認めようとせず、権力を握ったままである。21世紀には、そうした状況がさらに顕在化し、対応が迫られるだろう。

ある意味で、それは世代間闘争と呼べるものになる可能性がある。その前兆は、すでに様々なところで見ることができる。

21世紀は、すでに未来ではなく、現実として目の前に広がっている。冒頭で述べたように、それは閉塞感と不透明感にあふれているようである。しかし、ITはある意味で、それらを切り開く道具になりえるかもしれない。20世紀の最後、世の中はIT革命と騒がしかった。しかし、21世紀の現在、大多数の日本人にITはごく当たり前の道具として受け入れている。すでに「革命」ではない。世代間闘争の最終的な勝負は決まっている。しかし、前世紀の夢に固執する勢力が強く、勝負がつくのが遅ければ、日本の将来は危うくなるだろう。

もちろん、ITの導入で、なにもかが一気に解決するなどという楽観的な予想は全く持っていない。これは単なる道具である。しかし、将来にその遅れを取り戻すのは困難になる。過去にも同じような例がある。明治期に建設された旧国鉄路線は、直線区間が多い。街道の機能が奪われ、町が衰退すると建設反対が起こったため、市街地から離れた原野を走らせたために直線になったと言われる。その後の結果は、言うまでもない。今は、それが地球規模で起こるのである。

中小企業や地域経済を考えたとき、ITをキーワードにして、問題を掘り下げていくと、実はその根底にある問題に気が付くはずである。それが、本稿で述べてきたことである。三つ挙げた問題の何を最初に突き崩せるかは、分からない。しかし、その一つでも突き崩せられれば、他の二つも大きく動くのではないかと考えている。もし、動かなければ、我々の21世紀は、閉塞感と不透明感では済まなくなるだろう。